

# ガンダーラ彫刻と大乘仏教の推移

高 橋 堯 昭

私はインド・バキスタン或はアフガニスタンの仏教遺跡や仏塔の巡礼を重ね、仏塔のまわりや祠堂僧院の壁に祀られていた仏像を尋ねて来た。

或はバキスタン最大のラホール博物館、ガンダーラ美術の宝庫ペシャワール博物館、遺跡の中に建つタキシラ、スワット博物館、そしてハツダの美しいストゥッコをもち、東西文化交流の証拠たるベグラムの出土品、そしてヒンズークシユ山脈の北側の異質の美術をももつ多彩なカブルミュージアム等々何度も何度も尋ね歩いて来た。その中でふと或る種の仏像が他の群と異った系統の中にあるのではなからうかと気付くに至った。即ちガンダーラの彫刻はほぼ単身像か仏伝図といって釈尊の生涯の事績を示す群像パネルであるが、ここにとり上げた二枚の写真はそれらとは異質のものと私には思われて来た。

(一)

そもそも仏像は常識的にまず二世紀の中頃、クシヤン朝のカニシカ王の直前に成立したといわれる。これはカニシカ王のコインに仏の姿がミントされているから、それ以前に仏像があったと推定されるからである。



写真A

で一緒に食をとっていたことになる。これに対して主塔から少しはなれた山の尾根に散在する僧院からは食器類が多く出土しているから、同じ中心塔を拝みながら何らかの理由で食事を共にしない一団があったことが推定されると報告書は論じている。これについて私は二様に考える。即ち一つはこの小乗教団と異った他の小乗のグループの存在かと、然し小乗教団同志は食べものは同じだから、むしろ食べものが違う大乘のグループの存在が注目されるのではないかと。既成の教団と意見を異にし一緒に食事をしないこのグループは、ひっそりと山陰で般若を論じアミダを念じ

然しカニシカ王の時代には大乘はその芽萌を出してはいたが、未だほとんど形をなしていなかったといつてよく、為に教団は小乗仏教のみで、大乘はあるとすれば小乗の寺の塔を拝みつ、或は在家的に或は小乗の寺の片すみに集った小グループに過ぎなかった。これに関して私は再三悽神等に稿を書いた。これを略述すると。即ち京都大学の調査隊がメハサンダの山寺を発掘した時、主塔の近くの僧院群からは食器類が出土せず厨房からのみ出土した。これはこれらの僧達は食堂

又法華を誦していたのかも知れない。これがやがて将来大乘教団に成長して行ったと考えられる。だからこの時期は大乘を志すグループは大した拠点をこそもたなかったがその熱烈な意欲とこの新運動に加わったベダダ文学の精通者達によってサンスクリットによる物凄い量の教典が作り出されて行った。一見教典のみあって根拠となる寺のない「幻の教団」と大乘がいわれたのはこんな理由からであったと思う。

だからカニシカ王の保護したのも当時

現存した小乗仏教に外ならず、為に俱舎等のアビダルマ哲学が最高度に隆盛を極めた。この仏教の隆盛が又造像の氣運を刺戟したのは論をまたない。「仏像の起源」の高田博士は仏像は大乘にはなく小乗で起ったと言っている。たしかに小乗の時代に起って大乘仏教がおこったから仏像が出来たのではない。然しだからといって小乗から仏像が起ったといえるだろうか。

小乗の立場では我々は阿羅漢に達するにすぎない。我々と仏との間には深い断絶がある。だから人間の姿によって

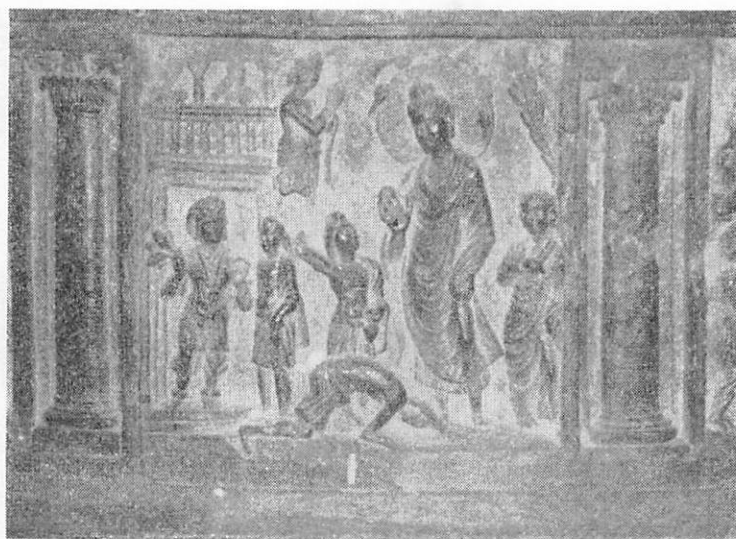


写真B サリパロール出土

仏である釈尊はとうてい表現出来ず、有名なサンチーの仏塔の如く、菩提樹ストゥーパ或は法輪で仏を表わした「無  
仏の仏伝図」が作り出されたわけである。然しギリシャ・ローマの文化所謂ヘレニズムの影響で「その最も完全な人  
間即神」という立場がインドにしみこみ、やがてそれが小乗の立場ではもり切れぬ「より広い」立場に発展し、そこ  
からやがて仏像が形成されて来たといえよう。高田博士のいうように仏像の作り出された二世紀の前半には大乘の寺  
がなく小乗のみであり、従って小乗の寺で仏像が作り出されたということ、この仏像を作り出した立場思想とは自  
ら別のものであると思う。然しながらこの出来上った仏像は依然として小乗仏教の寺に収められていた。この思想と  
既成組織とのジレンマ、パラドックス、これが歴史の微妙な所だと思う。

然して形成された仏像は既成の小乗の寺に安置され祀られるから、小乗の寺の教儀に則ったものに限られるのは当  
然である。例えば小乗は過去七仏しか認めず、歴史的釈尊を中心とする。写真Cのシクリ出土のストゥーパの燃灯仏  
供養のパネルの如く、因位の釈尊の立場を貫くのは当然のことである。

これに対して私が「何らかの異った立場」を感じるのは、ラホールミュージアムの「舍衛城の神変」写真Aと称せ  
られるものや、これとほとんど同じ形式であるペンシャル博物館の釈迦説法図或はペンシャル博物館、サリパロール  
出土の釈迦説法図写真B等の一連のものである。この中で特に注目させられるのは写真Bである。釈尊をかこむ無数  
の仏達、果してこれらが小乗のカテゴリーで割り切れるものだらうか。大乘では三世十方一切の世界を認め夫々に仏  
を考えるから無量百千億の諸仏の存在を認める立場である。従って小乗の釈迦一仏の仏伝図とは自ら差異がある筈で  
ある。今あげた写真A・Bに共通する大勢の諸仏菩薩が、いろいろの姿勢で仏陀の説法に耳をかたむけている。これら  
に「法華経の序品」の説相の姿を私は想像するのである。まさしくこの中心の仏は大乘経典をとく久遠の仏であり、



まわりは三世十方の諸仏であると思う。

これらの作品は作風からみておおよそ三・四世紀即ちAD二〇〇年代から三〇〇年代にかけてのものと推定されているから經典史的にみて、当時大乘思想や教典も出現していたということとを考え合せてみれば、大乘的なものであってもけっして不自然ではない。

然もこれら写真ABで代表される一連の仏達は皆判でおしたように蓮華座の上に坐している。所謂「蓮華座上の仏」というのがその特徴である。蓮華座については「大智度論卷八」に「諸仏は宝華の上において結跏趺坐して六波羅蜜を説く（大正一二、九四下）」とあり、又龍樹の作とされる「菩提資糧論頌」には「造作仏形像、端坐勝蓮華」とあり、この例証をひいて蓮華と大乘の深い関係にあることを静谷正雄氏は考証している。これを参考にして考えると更に更にこれらのプレートは当時支配的であった小乗とは異質のものであるといえる。

何度も述べたように、当時は確たる大乘教団がなく、これらが小乗の寺に収められていたと見ることが自然である。そして

それは小乗がこのような彫刻を寺内に安置したことは何かしらこれに共感するような時代的要請、時代思潮になっていたことが考えられ、興味深い問題を投げかけてる。

然らば大乘の寺はいつ頃起つて来るかを記録で見ると、法頭は烏菴（烏丈那）国の五百の僧伽藍は、「皆小乗学」宿呵多国（スワット）は「其国仏法亦盛」として大小を言はず、健陀衛（ガンダーラ）は「其国人多小乗学」といつているから、この皆と多とのニュアンスの相違からみてガンダーラでは大乘は西紀四百年代のはじめ絶無ではないが大してないと考えていい。これが玄奘になるとガンダーラは大小乗あり、私が問題とする咀又羅国（タキシラ）はほとんど大乘に化していることを明記しているからこの間のいずれかの時に変つて行つたことを示している。

□

前述のシクリ出土の「燃灯仏への供養」写真C、釈尊が前世に老母であった時、仏の歩む道が泥だらけだったのでゴザを敷いたが未だ足りない。そこで自らの髪を泥道に敷いて仏を通したという有名なジャータカ。これは因位の釈尊の菩薩行だが、この燃灯仏供養の彫刻はこのガンダーラからアフガニスタンにかけて出土し、玄奘の大唐西域記にもその霊場がジェララバードにあったとしているから、この燃灯仏の物語の流布したその地方に、大乘が寄しくも起つたということは無関係ではなからう。因位の釈尊の菩薩行を三世十方一切の諸仏の立場に拡大し深化して行つた必然ではなからうか。

又この燃灯仏の彫刻の出現と同時代に然も菩薩思想の流布したこの地方で、仏塔造立供養を録する碑銘に「一切諸仏供養のため」という奉獻者銘が現れている。これも高田博士の言うようにこれ又大乘に限らないであらうが、すべてを小乗と見るわけに行くまい。むしろ小乗の寺でも「一切諸仏供養のため」という考え方に移行せざるを得ない時

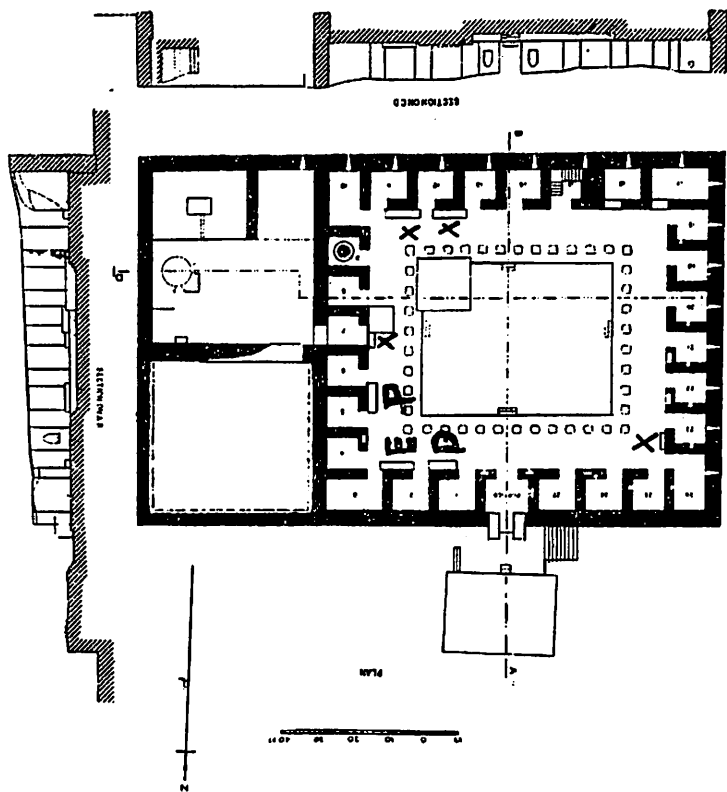
代性が問題となるのではなからうか。小乗の立場に立つも、このわくをはみ出して来た新しい時代新しい思想に興味をひくのである。その一例として所属ははっきりしないが、もともとは小乗時代の寺であるダルマラージカの大塔内小祠堂から発見された銀薄板銘文に「一切の諸仏への供養、諸辟支仏への供養、諸阿羅漢への供養のため菩薩堂を建立した」とあるのは、当時の新しい思想への反応を示したものであらう。

然して前後するがこの「菩薩」という言葉はバールフットの彫刻中「マヤ夫人白象入胎図」の銘には如来 (Buddha avatha) とあって菩薩とはなく、又サンチー仏塔の銘にも菩薩という言葉はないからBC一五〇年頃を上限としてAD五〇年頃の二百年間に考え出されたものと干瀉博士は想定している。而も前述の如く最初は因位の釈尊自体の菩薩行だったものが、より徹底して三世十方の諸仏の夫々の菩薩行という大乘への深化があったのだと思う。従ってこの菩薩思想を回転軸として深化展開していったのが小乗から大乘への道であったと考える。然もこの担手が大乘のボッツのグループであり、これが經典を編纂し大乘運動を展開して行ったのだと思う。

(三)

私は一九七四年十月バキスタンのラワルピンディに滞在、ここから三十キロ程の有名な仏教遺跡タキシラを見学中風邪をこじらせて、スワットの仏塔見学を断念静養中、所在なきまま日参したタキシラで、今まで見落していた重大なものに気付いた。それは何度も何度も見学したモラモラドゥクの僧院で「二仏並座」の座像を三対見付けたことである。それまではそれらのすぐ隣りにある「長老を祀る記念碑たる美しいストゥーパ」に幻惑されて、この二仏は見ていたが自覚しなかった。その証拠に何度もちゃんと写真にうつっているではないか。

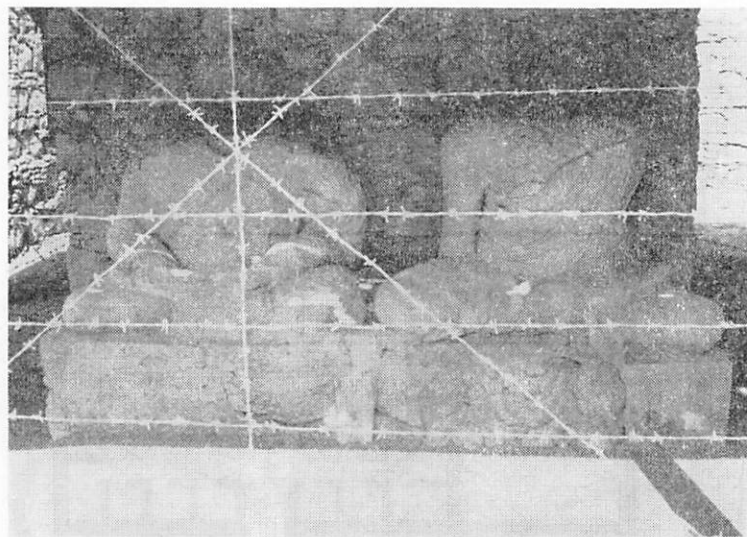
それは僧院の中、個室の入口と隣の個室の入口との間の壁二米位の空間に、恰も等身大の仏像が二つ同一の台座の



上に並んでいる。これが三組あって政府によって金網で保護されている。然し三組とも頭部はない。入口より仮りに写真DEFとするがこの中一番左右相対なのはEである。明らかに同一の台座、法衣の裾も適当で体もほぼ同じである。Dは左側の仏の方が少し背が低く太い。又Fは一番興味あるものである。左側が少し大きくうつつているが、これはカメラが左側によつたせいでもあり、おまけに広角レンズの為右側が小さくなったが、これ程の差はない。然し多少は左側の方が大きいかも知れない。これについては後程詳述する。このFの台座が面白い。光背をもつ仏が何体も彫られているからである。

帰国してからマーシャルの大冊Taxila





をみると、この外に数個の二仏並座の跡があり、現在もそのスペースをもったくずれた台座が残っているとあった。早速これを一九七五年春、再調査すると見取図で×印をつけた所にくずれた台座の石が積まっていた。更にこのモラモラドウの僧院から三軒弱東南のダルマラージカ大塔の中心塔をかこむ奉獻小塔の群の中、P2塔と人がやっと通れる位のせまい通路で接するP1塔のストーパーの壁に二仏が一組残されているのを見付けた。(写真G) 高サ五十センチ、巾三米の台座に一米五十センチ位の坐像が二つ並んでいる。これ又頭部はないし、右側の仏は右肩までこわれている。

それ以来いろいろと文献で二仏を尋ねると東京博物館紀要第七号の藤田国男氏の論文ハツダの項に奉獻ストーパー、タペカラーンの復元図がありそこに沢山の二仏がある。(写真H)

これは、ハツダをはじめ発掘したフランスの学者Barthou-Enの報告書によるから十分信がおける。又この外二仏が想像されるものとしては、アフガニスタンのカプール東北七十キロかってカニシカの都であったカピサベグラムのKoh-i-Palhav-

目 寺の丘の斜面ショットラク塔、その最下段の中央よりの二つの仏龕が下段両翼の仏龕と比して又、このハツダのストゥーパとの類推に於て二仏がおかれたものと見ていい。

このタキシラからアフガニスタンにかけての範圍にこの「二仏」が見出される所が、実はかつて燃灯仏の物語りの流布した範圍とダブる。即ち共通の基盤の上に立つ点が興味をひく。この地こそ菩薩思想が流布し、大乘が成立発展した地域だからである。この地域に「二仏」が作られた。「二仏」はいうまでもなく、法華經の宝塔品の場面を前提するもので、その他に二仏の思想的根拠はない。モラモラドウの二仏(写真F)の台座には光背をもった仏が四五体も彫られているから、当然この光背をもった仏よりも上位のもでなければならない。

私のガンダーラ見学の経験から仏像は大體一尊か、或は三尊かであり他は一尊に礼拝群像又は仏伝等の物語の彫刻である。特に三尊形式はかのカニシカ王奉獻のシャジキデリー大塔から出土した舍利容器、インドラとブラーマン(梵天と帝釈)を従えた中央釈尊の三尊形式が釈迦三尊弥勒三尊等の三尊形式の祖

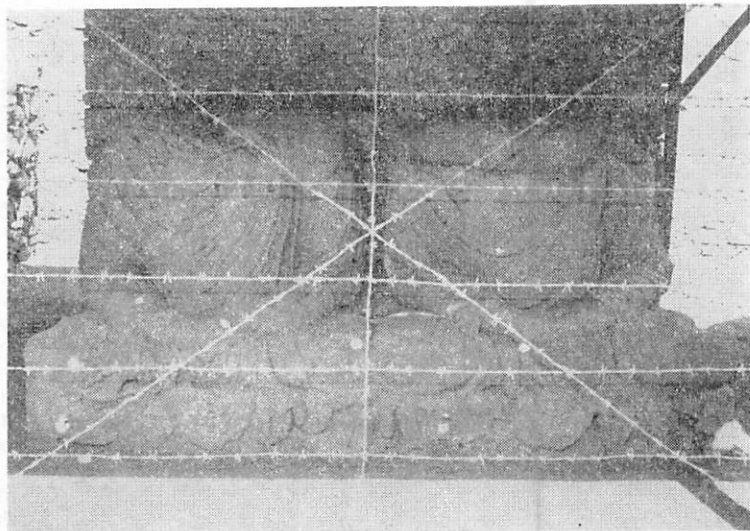
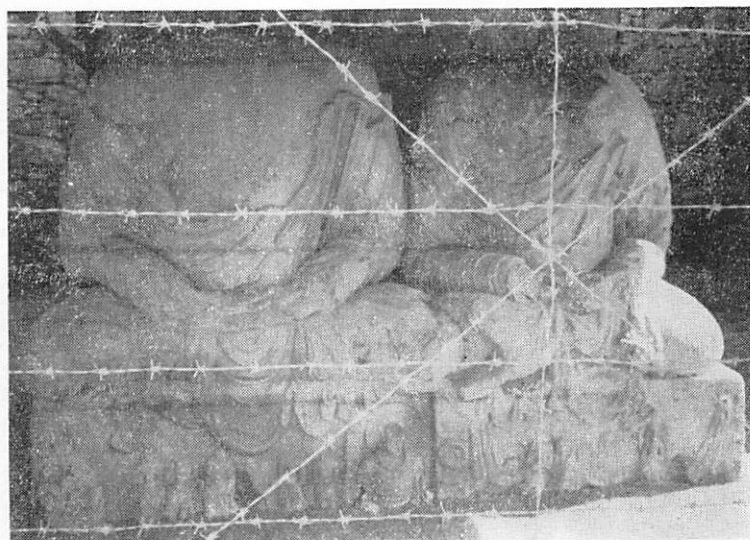


写真 E



といわれている。仏塔でも、アフガニスタンのチャリカル南西四キロのトーフダラー大塔の主龕が一段と他の龕より大きく、両翼にクロバー形に小龕をもっているのも、明らかに三尊形式のものであったことが知られる。このように三尊形式はまことにポピュラーであった。

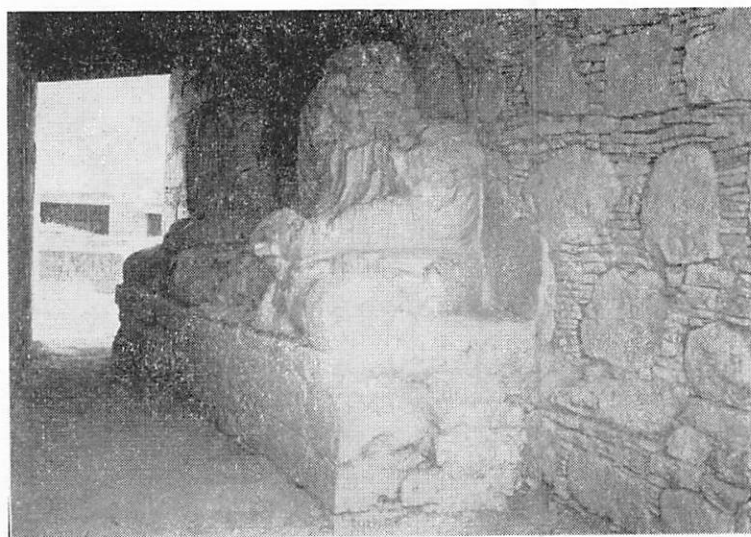
これに対して、私は今まで長いことかかって二尊の形式をこのガンダラーで探し求めて来た。然も数年前から現ラホールミュージウム館長のダル氏にも依頼して探してもらって来たが二尊形式特にガンダラー美術初期のものであるあの黒色片岩製の仏像は遂に発見出来なかった。しいて二尊形式をあげるならば仏像ではないが、鬼子母神像、即ちハリティがその夫パンテイカと並ぶ像しか見出せなかった。それらはギリシヤ的な風貌をもち、明らかに相当に早い時期即ち二三世紀のものであると考えられるが、これ以外にどうしても二仏のものは発見出来なかった。それ故私はかつて法華経の成立当時、このハリティとパンテイカの像は相当普及していたと考えられる（現在ガンダラーで相当数の像が出土している）から法華経の作者は或は宝

塔品の釈迦多宝の二仏並座の教義を説明するのに、このハリテイとパンティカにそのヒントを得て二尊の形式をあみ出したのではなからうかと考えた程だ。

然しここで問題となるのは、私の見出したモラモラドウの二仏、ダルマラージカの奉獻小塔の二仏、ハツダの復元図やショトラ塔の仏像の時代は三世紀も終りも終り、むしろ四世紀から五世紀のもので、当時全盛を誇ったストゥツコのもので、二三世紀の黒色片岩製でないこと。この黒色片岩製とストゥツコの差が問題となるのである。即ち黒色片岩製の二仏を求めた私の努力が報われなかったのは、当時は未だ大乘が普及せず、写真A・Bの如く大乘思想と思われる彫刻も三世紀後半から四世紀にかけて出て来るといふ歴史的な配慮の欠除からきていると思う。だから四五世紀のストゥツコ像に二仏が見出されることはこれが大乘の発達過程から見てごく自然のことであった。

然してこのストゥツコながらガンダーラでは珍しい二尊形式の仏達についても一度考えて見よう。

モラモラドウの僧院の部屋の入口の壁のスペースが一尊では



写真G

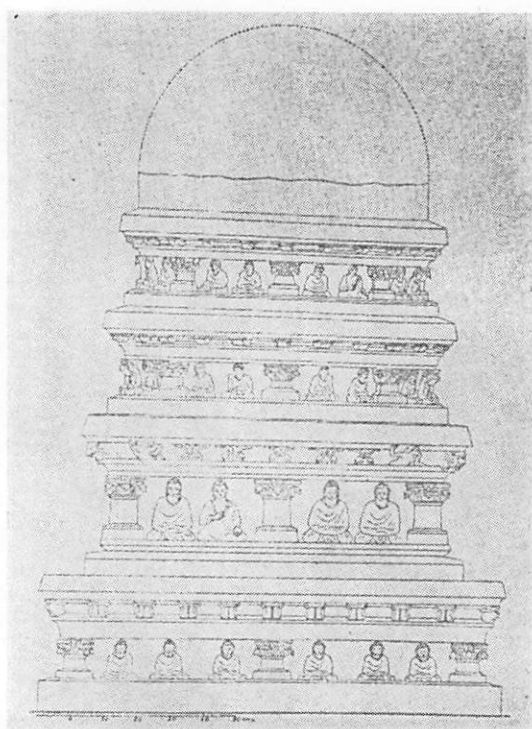


写真 H

タキシラの博物館の中に展示されている同じモラモラドウの寺のメインストウーバから移した一群の彫刻群、その一番両側の柱と柱との間に一見二仏が坐っているように見えるのと比較すれば一目瞭然である。これらは台座も違うしその感じが全然異っているからである。

又ダルマラージカの奉獻小塔 P 1 の壁面の二仏にしても、私の測った所たしかにこの両側に一体づつつけ足して四仏とすることが出来ないわけではない。四仏の例はモラモラドウの僧院の近く、ジャウリアンの山頂のストウーバの基

大きすぎるから二尊にしたという偶然性について一歩下って考える必要はありはしないだらうか。然しこのような場合、大概は一尊に礼拝者やこの像を寄附する奉獻者の像を入れるのがならわしになっているから、スペースをうめる方法にはことかかない。然も仏像を作る場合そんな安易な気持で仏像を作る筈はないから意識的に二仏として作ったと考えていい筈である。特に写真 F の台座には光背をもつ仏を彫ってあるから、それなりの意義を深く藏して居たことだろう。これは



写真 I

壇にあるから四仏は必ずしもないわけではない。然しこのP1の奉獻塔がはじめから四仏であったらP2塔との間が極端にせまくなって通り抜けに不自由になる、即ち繞道が容易でなくなる。どうしたわけかP1とP2は平行でなく写真Gの二仏の向う側のP1とP2との間が不規則にせまくなっているからである。

又写真Gでも理解されるであろうが、この台座ははじめから二仏のための台座として作られたのであって四仏のものを持ちだしたものでないことはその構造上から理解されよう。だからこの二仏は意識的に二仏として作られたというところが大事なのである。

然してこの二仏が三対現存し、その他四ヶ所にその跡があるとみられるモラモラドウの僧院は主塔と僧院との間に区切りがある。所謂「塔地と僧地」が截然と分けられている。これは小乗の律に則って建てられている。だからこの寺はもともと小乗仏教の寺である。ダルマラージカの大塔の方は塔と僧院がはっきりと分けられていない。塔のまわりに僧院のある、そしてその所属のはっきりしない塔であるが、前述の如くアソカ王の創建カニシカ王時代の大修であるから、未だ大乗はなく、あったとしても極くわずかの小グループに

写真J  
ギリシヤ風の鬼子母神



すぎなかったから、小乗か、小乗系統のものと考えてまず間違いなからう。

玄奘はこのタキシラについて七世紀初頭に「僧徒寡少ながら大乘」といって大乘に変わっていると云っている。もつとも玄奘の言及しているのはクナーラ塔、バラータ及び当時の都だったシルスク等であるが、このタキシラ最大の寺で然もクナーラから山伝いに行けば一軒にもみたくないダルマラージカに行かない筈はなく、又シルスクから捨身のバラータへの途中の、タキシラ有数の僧院たるモラモラドウへ立ちよらない筈はないから、これらの寺がAD六百年代のはじめにすでに大乘になっていたことは事実であろう。更にこれを示す例としてタキシラ博物館に収められたモラモラドウの主塔の

あの荘大な仏像群は美術的に見ても大乘の幻想的な物語を表現しているとしたか考えられない。

更にこれに関して一つの問題がある。それは三対の二仏並座の中完全な対象的なのはEであるといった。これは問題はない。問題になるのはFである。写真のレンズのせいといえども右側が少し小さい。然しよしんば少しの大小があってもこれ又問題とならない。釈迦多宝の二仏、必ずしも同一にしなければならぬものではないからである。多宝如来のことを漢訳に「全身散ぜざること禪定に入るが如し」サンスクリット本（岩波文庫法華經）「あたかも瞑想を完成したかのように、四肢が瘦せ身体は衰えて……」とあるからその特徴を表現する為Dのように大小があつたのかも知れない。然し問題は台座である。写真Fの左側の仏の台座には両側に比較的大きな光背をもつた仏、中央は仏というより奉獻者が五人いる。然し右側の方は中央に奉獻者らしいのが三人（中央が缺けているからもつといただろう）いて両側の光背をもつた仏はいない。

それに加えて左側の仏の膝が右側の仏の膝の法衣の中にめりこんでいる。これはもしかすると左側を先に作つてあとから右側を作り足したのかも知れない。（それにしては背後の壁からはみ出ないでピタリ二体が壁のスペースに収まっている所が不思議だが）もし後からつぎ足して二仏にしたとするなら、一仏であつた時代から二仏が要請される時代に移り行ったことが考えられないだろうか。これも左側の仏を作つてからその時代の経たない早い時点で、なぜなら両者を比較するにほとんど新旧の差は見出せないからである。即ちこれは二仏をこの僧院が信仰し採用するようになつて行つたプロセスを示すものではなからうか。そしてその時代になるとEのような完全に一元的な二仏が作り出されて行つたと考えるのが自然であらう。然しこれはあくまで想像であつて仏像製作の前後を示す資料はない。



こう考えて来ると大体何世紀頃に大乘の寺は現れ又小乗の寺は大乘化して行ったのだろうか。私はこれを四五世紀と考えたい。もしかするとこれ以前「舎衛城の神変」の彫刻の出で来た三世紀の後半にも大乘に共鳴した一部のものは或は出たかも知れぬが、常識的にはこのストッコの仏像、そしてこの仏像の安置された壁の構造(写真G参証)から見て四五世紀とみて間違いなからうと思う。

特にこの地方は白フンの攻撃で寺がこわされ再び造塔造像の力がなくなってしまったから、白フンの侵入を五世紀の中期として、これを年代的に下限として考えていい、更にこのストッコ彫刻の隆盛はキダラクシャンの侵入によって隆盛をみたから、キダラクシャンの侵入が四世紀半ばだから、これを上限として四世紀半ばから五世紀の中頃までに、この二仏が作られたと見ていいのではないか。然もこの二仏を何組も、かく意識的にはっきりとした形で作り出したのは大乘教団の成立を意味し、又小乗から大乘への転宗があったとみるのが自然であろう。従ってこの四世紀から五世紀にかけて法華経を中心とする大乘仏教教団がこのガンダーラからアフガニスタンにかけて流布していたことも前述の二仏を祀った僧院や仏塔から推測される。これは又このタキンラやガンダーラからそう遠くないカシミールギルギットからサンスクリットの法華経が出土している事実からも十分裏付けられると思う。

要するに黒色片岩のガンダーラ彫刻に二仏並座がなく、ストッコにそれがあるのはこの小乗から大乘への移行の時間性を示していると共に、ガンダーラ彫刻の中特異の「舎衛城の神変」と称される一連のパネルが仏教の歴史、特に大乘仏教の発生と展開を知る上に重要な資料を与えているものであると思う。

参 考 文 献

Mashall, Taxila 3voll

Ingholt, Gandhāran Art in Pakistan

Smith Early history of India

協力：ラホール、タキシラ、ペシヤワル、カブール博物館。

京都大学、メハサント、バサークルとジエララバード、カブール

山田龍域 大乘仏教成立論序説

足立喜六、大唐西域記 2 Voelr

高田修 仏像の起源

布施 法華経成立史

千潟龍祥 ジャータカ

静谷正雄 大乘仏教の成立過程

国立博物館紀要